

「書いて伝える力を育む授業」

— 小学校第1学年の書く活動の実態を踏まえて —

M15EP008

清水 ゆき菜

1. 問題

(1) 書くことへの問題

近年、PISAの調査や、全国学力・学習状況調査など、様々な調査が行われているが、共通して、日本の児童生徒は記述問題の白紙回答が多いという課題があるとされている。PISAでは、「日本の読解力自体や正答率はよくなってきているが、日本の平均無答率がOECDの平均無答率を上回っている問題はいずれも自由記述の問題である。」としており、日本の子どもたちの「書く力」はまだ弱い傾向があるということが分かる。また、国立教育政策研究所(2006)の「特定の課題に関する調査」で、小学校4年生から中学校3年生に質問紙調査をした結果、書くことを好きではないと思っている児童生徒の割合が50%近くいることが明らかになった。

書くことを好き、楽しいと思えるためには、書けること、相手に伝わることが重要になると考える。そのため、「書いて伝える力」を高めていくことが必要である。特に、書くことの入門期である小学校低学年のうちから、書いて伝える力を育むことが必要である。

(2) 「書いて伝える力」とは

国語科の小学校低学年の児童の「書くこと」の目標は、「経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせるとともに、進んで書こうとする態度を育てる。」である。学習指導要領解説で、「「順序を整理」するとは、書く事柄を、出来事や行動、情報などの順序に沿って整理することを指す。」としている。順序を整理することは、読み手に伝わりやすい文章を書くためには必要なこと

である。そこで本研究では、順序を考えることを中心に、読む人に伝わりやすい書き方をする「分かりやすい文章を考える力」を「書いて伝えるための力」の一つとする。

また、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項については、「国語の果たす役割や特質についてまとまった知識を身につけ、言語感覚を養い、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることに重点を置いて構成している。」としており、言葉の決まりや特徴なども「書いて伝える力」に必要なのではないかと考えられる。特に、助詞や特殊音、句読点などを正しく表記することは、相手に伝えるためには重要である。

そのため、本研究では、書く基礎として「言葉を正しく表記する力」、そしてその上で「分かりやすい文章を考える力」を「書いて伝える力」とし、それらを育むことを意識した授業のあり方を探ることを目的とした。

2. 研究・実践の形態

(1) 実習校について

実習校:山梨県内公立小学校

(2) 手立て

① 授業参与観察

第1学年の学級(29人)で授業参与観察を行った。児童の書く活動場面から、小学校第1学年の児童の書くことに関する実態を分析し、研究を深めた。

② 児童の実態の見取り

作文を書く活動を計2回実施した。そこから、児童が書くことに関してどのような課題を有しているのか、分析を行った。

③ 授業実践

授業参与観察や実態の見取りから考えられる児童の課題を踏まえ、計画し実践した。

3. 児童の実態の見取り

(1) 授業参与観察から分かる児童の実態

① 児童が興味をもつ活動

ゲームのように、友達と競い合ったり正解不正解があったりする活動を行った時、普段はなかなか活動に移ることができない児童もすぐに取り組み始め、集中して活動を行っていた。時間が来てもまだ手を止めていなかった児童も多く、ゲーム感覚で楽しくできる活動は児童の興味関心を高めることが分かった。児童が楽しいと思えることを大切にすることで、自然と児童が積極的に活動に参加し、知識や技能も身につくとと言える。

② 視覚の優位性

国語の授業で、教科書の文章を拡大したものを黒板に貼り、そこにポイントを書いていた。1年生は、まだ聞くことや集中することが難しい児童や、教科書に注目することがなかなかできない児童がいる。教科書の拡大図を黒板に貼ることで、どこをやっているのかわかりやすいようであった。全員が分かるという視点でも、視覚化の工夫は大切である。

③ ワークシートの工夫

図鑑で調べたことをノートにメモをし、ワークシートに清書する活動では、ワークシートに番号がふってあり、それがノートと対応していた。書くところも枠で囲まれており、児童にとって書きやすいようであった。自由に書くということは大切なことであるが、簡単なようでもとても難しいことである。学習経験の少ない1年生が書く時は、ある程度、書くことや枠を設定することが重要である。

④ 音と文字の一致

自由帳に「こんびゅーたーしつ」と書きたかった児童が「こんびゆたしつ」と書いていた。しかし何と読むのかを聞くと、児童は正しく発音していた。ここから、1年生は話す

言葉と文字がまだ一致していないということが分かった。また、正しく発音できてはいたのでこの児童にとって「びゅ」は「び」と「ゆ」をくっつけた「びゆ」で成り立っている。このように児童の中には独自の文字のルールがあり、それを一般的な文字のルールに直していくことが必要であると分かった。

(2) 作文から分かる児童の実態

書く活動の経験がない小学校1年生の児童の書くことに関する実態を把握したいと考えた。児童の成長や課題を把握するため、文を考えて書く経験をする前の6月16日と文を考えて書く活動を経験した後の9月8日の計2回作文を書く活動を行った。題材は、6月16日(第1回)では、「たのしかったはるのえんそく」、9月8日(第2回)では、「たのしかったなつやすみのおもいで」である。

第1回の作文では、自分で考えて書くことは初めての児童が多いにもかかわらず、意欲的に取り組み、最後まで真剣に自分で考えている姿が見られた。しかし、いくつかの表記に関する課題があることが分かった。特に多かったのは、促音が正しく表記できていなかった児童(16人)、「は」「を」の助詞が正しく表記できていなかった児童(10人)、句読点が正しく使えていなかった児童(12人)であった。また、内容に関しては、自分の言いたいことを思いつくままに書く児童が多かった。あくまで、作文に書かれていた表記であることや、まだ使い慣れていない段階であることを前提として言える児童の課題である。

第2回の作文でも、児童全員が意欲的に取り組む姿が見られた。促音が正しく表記できていなかった児童(8人)、「は」「を」の助詞が正しく表記できていなかった児童(5人)、句読点が正しく使えていなかった児童(5人)と、前回挙げられた課題については、半数以下の人数となった。また、内容に関しては、時系列に沿って書くことができていない児童(図1)や、分かりやすく説明を加えることがで

きている児童(図 2)もいた。

第 1 回の作文で多くの児童に当てはまった課題が、第 2 回の作文では半数以下の人数になっていたのは、ひらがなの学習が終了し、絵日記や授業感想など書く経験が増えたことや、本や教科書など多くの文章に触れてきたからと考える。しかし、児童が書いた作文や、他の授業での書く場面を見ると、やはり促音や助詞、句読点は正しく表記できていない児童もいる。そのため、意図的に日本語の表記に関する学習の場を設定することが必要である。また、内容については、分かりやすい文章を書くことができていく児童が出てきたので、より多くの児童にその視点をもつことができるよう、分かりやすい文章はどのような文章かを考える機会を意図的に設定することが重要なのではないかと考える。



図 1. 児童の書いた作文の例①



図 2. 児童の書いた作文の例②

4. 授業実践課題の設定

(1)実施対象

第 1 学年の学級 29 人

(2)単元について

①単元名

家の人にお気に入りのものを紹介しよう！

②教材名

「しらせたいな、見せたいな」

③単元について

本単元は、学校にある自分のお気に入りのものを家の人に伝えることを目的とした単元である。「言葉を正しく表記する力」や「分かりやすい文章を考える力」を育むために、文章から助詞や促音についての間違いを探す活動や、文章にどの助詞が当てはまるか考えるクイズ、促音のある言葉の手たたきゲームなどを単元の最初に取り入れた。第 2 時と第 5 時の初めにも、10 分程度活動をし、継続的に実施した。第 5 時には、読む人の立場になって考えられるよう、どのような文章が読みやすいかを考える活動を計画した。また、他者の意見を聞くことで考え方を深めることができるよう、第 7 時の短冊を並び替えて構成を考える時間では、自分で考えた後ペアで意見を交換する活動を行った(表 1)。

1 年生は、特に何かを説明をする文章を書いた経験は少ない。そのため、上記以外にも様々な課題があり、手立てが必要になる。本単元では、伝えたいものについての情報を収集すること、収集した情報を文章にすることに課題があると考えられる。以上のことを考慮し、単元を計画した。

表 1. 単元計画

時	授業内容	主なねらい
1	・助詞や促音の間違い探しをする。 ・助詞や促音に関するクイズ(どっちかなクイズ)やゲーム(手たたきゲーム)をする。	・課題である促音や助詞を正しく理解するため。
2	・お気に入りのものを決める。 ・学習の流れを確認する。	・意欲を高めるため。
3	・対象を観察し、絵を描く。	・よく観察させるため。
4	・対象を観察し、特徴を短い言葉で書き込む。	・文章を書くための情報収集の

		ため。
5	・二つの文章を比べて、読みやすい文章をどのような文章かを考える。	・分かりやすい文章の書き方を実感するため。
6	・絵に書き込んだ言葉を、構成や日本語に注意しながら一つずつ文章にする。(短冊カード)	・文章にするまでの流れをスモールステップで学ぶため。
7	・教師の例文をどのように並べるか考える。 ・短冊カードを並び替えて、文章にする順番を自分で考える。 ・友達と意見交換をする。	・読んだ人が分かりやすい文章の構成を考えさせるため。
8	・短冊カードを清書する。	
9	・友達と書いた文章を読み合い、良いところを伝え合う。	・自分の文章の良いところに気がつくことで、次に書く意欲をもたせるため。

ア.「言葉を正しく表記する力」のための活動

助詞や促音などの言葉の使い方を学ぶために、第1時で以下の活動を行った。

【間違いさがし】

以前児童が書いた助詞や促音の使い方が間違っている文章を提示し、間違いを探す活動を行った(図3)。ねらいは、間違った文章を提示し、声を出して読むことで、「間違った書き方をしている文章は読みにくい」と感じさせること、そのように感じさせることで言葉の正しい使い方を意識させることである。

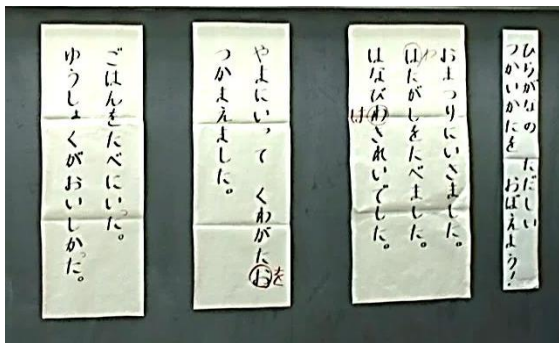


図3. 間違い探しの活動

【どっちかなクイズ】

「は」や「わ」、「お」や「を」を使う文章を見て、どちらが当てはまるか考える活動を行った(図4)。ねらいは、「は」と「わ」、「お」と「を」の使い方をクイズ形式にすることで、児童たちが興味をもって楽しく学習することである。ただ問題を解いたり、説明をしたりするだけでなく、クイズにすることで、児童も飽きにくく、たくさんの量を扱うことができる考えた。

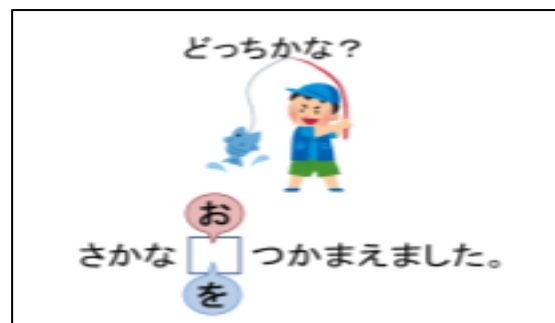


図4. どっちかなクイズ例

【手たたきゲーム】

小さい「っ」の入った言葉(きって、ねっこ)や、入っていない言葉(ねこ、ぶどう)のイラストを見て、拍の数だけ手を叩く活動を行った(図5)。ねらいは、手を叩きながら言葉を発音することで、促音の拍を感じさせ、促音を意識させることである。促音をただ文字として見るのではなく、手をたたいて拍をとらせることで、体感させようとした。より促音の位置を意識させるために、小さい「っ」の拍の時には、頭の上で手を叩くなどした。



図5. 手たたきゲームの様子

イ。「分かりやすい文章を考える力」のための活動

【文章の読み比べ】

第5時で教科書の文章と、教師が作った文章を比べて、どちらが読みやすい文章で、どうして読みやすいのか考える活動を行った(図6)。教師が作った文章は、句読点を書かなかったり、あまり詳しく書かなかったりと分かりにくい文章にした。ねらいは、句読点がなかったり、分かりにくかったりする文章に触れることで、読みにくいことを実感させること、二つの文章を比べることで、分かりやすい文章はどのような文章かを児童なりの根拠や理由をもって考えることである。

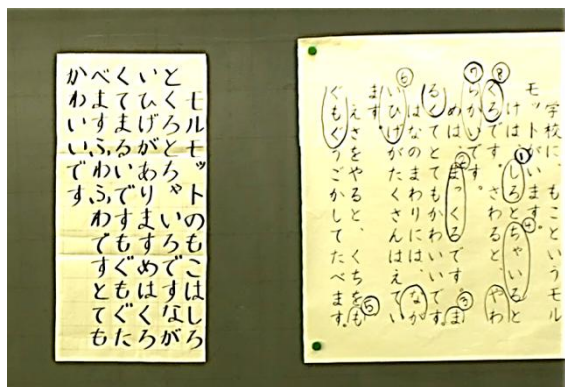


図6. 文章の比較例

【構成を考える並び替え】

第7時で、短文が書かれた短冊カードを並び替えて構成を考える活動を行った。最初に、教師の短冊カードはどの順番が良いか考え、分かりやすい構成を検討した。その後、児童は自分の短冊カードの並び替えを行い、文章の構成を考えた。また、より考えを深めるため、その後ペアでどのような順番にしたのか発表し、アドバイスをし合った。

ウ. その他の課題を乗り越えるための活動

【観察ポイントの視覚化】

お気に入りのものを紹介するためには、そのものについて観察し、情報収集をすることが重要となる。しかし1年生は、観察の経験

が少なく情報を収集するためには、観察する時のポイントをおさえる必要がある。そこで、観察ポイントを「見る」「触る」「聞く」「嗅ぐ」「思う」とし、それぞれを絵カード(図7)で示すことで児童の意識に残るよう工夫した。



図7. 観察ポイントカード

5. 授業実践と分析

(1)「言葉を正しく表記する力」のための活動【間違いさがし】

児童が以前書いた作文から「おまつりにいきました。はたがしをたべました。はなびわきれいでした。」「やまにいくわがたおつかまえました。」「ごはんをたべにいた。ゆうしょくがおいしかた。」の三つの文章を取り上げた。それぞれ、「わ」と「は」の使い方が間違っている文章、「お」と「を」の使い方が間違っている文章、促音が使われていない文章である。児童は、文章が黒板に提示されたらすぐに読み出し、「変だ。」と呟いていた。どこが変なのか聞くと、一つ目の文章では「「わたがし」の「わ」が違います。「はたがし」になっている。」「「はなびわ」の「わ」が「は」じゃない。「は」に直せばいい。」と間違いを正しく指摘することができた。二つ目の文章では「「くわがたお」が違う、わをんの「を」にする。」と間違いを指摘することができた。三つ目の文章では「「ごはんをたべにいた。」が小さい「っ」が入っていない。」「「かた。」が小さい「っ」がついていない。」と指摘し、「「い」と「た」の間につける。」「「か」と「た」の間につける。」と小さい「っ」を書く場所ま

で考えることができた。以上のように言葉の表記が間違っている文章に児童は違和感もち、意識することができた。

【どっちかなクイズ】

扱った問題，間違えた人数は以下に示す。

- | |
|--------------------------|
| ①さかな(を)つかまえました。(1人) |
| ②みず(を)のみます。(4人) |
| ③ふゆ(は)さむいです。(2人) |
| ④でん(わ)がなりました。(3人) |
| ⑤ぞう(は)おおきいです。(2人) |
| ⑥(わ)し(は)とりです。(1人)(1人) |
| ⑦(わ)に(は)こわいです。(0人)(1人) |
| ⑧わたし(は)(は)みがきます。(1人)(1人) |
| ⑨(お)にぎり(を)たべます。(1人)(1人) |

徐々に間違えた人数が減っていくことが分かる。しかし、中には間違える児童が増えた問題があった。「みずをのみます。」と「でんわがなります。」は、前の問題よりも間違える児童が増えた。「さかなを つかまえました。」はできていたのに「みずを のみます。」は間違えていたので、最初のうちは「を」の使い方が安定していなかったと言える。また、「でんわ」の間違いは「でんわ」を「～は」の形だと認識しているのではないかと考える。「わたがし」のように最初に「わ」がつく言葉は「わ」で、最後に「わ」とつくものは「は」と自分のルールをつくっていることが考えられる。また、児童は積極的に活動に参加していたが、問題数が多く、同じ形式の問題が続いたため、5問目で飽き始めて机に伏せる児童が出てきて、7問目には数人に増えた。問題の形式や進め方に工夫が必要である。

【手たたきゲーム】

扱った言葉は以下に示す。

- | |
|--|
| ①ねこ②ねっこ③かっぱ④ひこうき⑤ばった
⑥きって⑦はさみ⑧とらっく⑨すこっぷ
⑩びすけっと |
|--|

1問目はどのように手を叩くか説明をしなが

ら一緒に手を叩いたが、2問目からは、教師側の指示がなくても児童自ら手を叩いているなど関心が高いことがうかがえた。6問目からはただ手を叩くのではなく、小さい「っ」の時には頭の上で手を叩くよう指示をした。より体を動かし、頭を使うので児童たちは楽しいようであった。また、小さい「っ」だけ頭の上で叩くので、児童は自分で「っ」の位置を考えて手を叩くようになった。頭の上で手を叩くのは、小さい「っ」がどこに書かれているのか意識でき、有効であった。児童たちに手を叩かせる場面もあったが、筆者が主導で手を叩き、児童に真似をさせるという場面が多かった。徐々に児童だけで手を叩かせたり、児童を当てて一人で手を叩かせたりと段階を踏んでいくなど、介入を減らしていくなどの工夫が必要である。

【まとめのプリント】

本時の活動の最後に、まとめのプリントを解いた。1問目は助詞に関する問題で、「わ」と「は」、「お」と「を」を選ぶ問題である(表2)。2問目が促音に関する問題で、描かれたイラストをひらがなで書く問題である(表3)。

表2. まとめプリント第1問

問題	正解(人)	間違い(人)
わたしは	29 (2)*	0
わたしは	29 (1)	0
おんがくを	29 (1)	0
おんがくを	29	0

※ () は正解した児童のうち、一度間違えた後正解した児童の人数

表3. まとめプリント第2問

問題	正解(人)	間違い(人)
らっこ	28	1
すりっぱ	26	3
こっぷ	28	1

まとめのプリントでは、ほとんどの児童が助詞、促音共に正しい解答を書くことができた。授業を通して、助詞や促音を意識することができたと考えられる。特に、2問目では、解いている時、手を叩いたり頭を揺らしたりして拍をとっている児童もおり、言葉と拍が結びついたようであった。しかし、促音の問題は小さい「っ」を抜かしてしまったり、違う場所につけてしまったりしている児童もいた。そのような児童の中には、手を叩かせると、自分で気づいて直すことができていた児童もいたが、まだ小さい「っ」の使い方が定着していない児童もいたので、継続して勉強していくことが必要である。

(2)「分かりやすい文章を考える力」のための活動

【文章の読み比べ】

教科書の文章を①、筆者の考えた文章を②とし、読みやすい文章はどちらか聞いたところ、児童の意見は分かれた。筆者が作った文章は、できるだけ読みづらくしようとして作ったものであったが、こちらの文章の方が読みやすいと感じている児童も少なくなかった。児童は、どちらが良くてどちらが悪いという視点ではなく、どちらにも良いところがあるという視点で見ることができていた。①の方が読みやすいと答えた児童の理由は、「、「」や「。」があったから。」「特徴がいっぱい書いてあるから。」「文が長くて詳しく書いてあるから。」であった。②の方が読みやすいと答えた児童の理由は、「文が少ないから。」「一文が短いから。」「字が大きいから。」であった。どの理由も、分かりやすい文章を書くためには必要なポイントである。児童は、この活動で、読み手にとっては大事な視覚的なポイントや、内容的なポイントに気がつくことができた。予想していた展開とは違ったが、二つの文章を比べることで、どちらからも読みやすくするポイントを考えることができた。

【構成を考える並び替え】

まず教師の短冊をどのように並べると分かりやすいか考えた。児童は「何があるのか最初に分かった方がいい。」「最初に場所とかが書いてあった方が分かりやすい。」「2番目は色が書いてあった方が分かりやすい。」「形が先に書いてあった方がつながる。」といった発言をしていた。場所が分かる文を最初にもつてくると分かりやすいという児童の考えは、読む人のことをしっかりと考えられている。理由も言うことができており、分かりやすい文章を自分なりに考えられていると言える。この方が文が繋がるといったような、文章の構成にしっかりと着目できている児童もいた。次に自分の短冊の順番を考えた時も、どうしてその順番かと聞くと、この順番が分かりやすいからと、読む人の目線で考えることができていた。最後にペアで、順番についてアドバイスをし合ったが、ペアのアドバイスを受けて順番を変えた児童や、どちらが分かりやすいか話し合っている児童もおり、より考えを深めることができた。授業を通して、分かりやすいという視点で考えることができた。

(3)観察ポイントの視覚化

第2時に視覚化したカードを使い観察のポイントを確認した。児童の観察は「毛は茶色です。」「ひげが針のようでした。」など、見て分かったことを書いた児童は27人、「きゅっきゅっと音がします。」と聞いて分かったことを書いた児童は1人、「ぼこぼこしている。」「ざらざらしている。」など、触って分かったことを書いた児童は20人、「かわいいです。」「素敵です。」など思ったことを書いた児童は26人いた。児童全員が、見て分かったこと以外のことも書くことができており、多くの観察の視点で特徴を捉えることができていた。

6. 成果と課題

(1)「言葉を正しく表記する力」のための活動の成果

第1時の最後に行ったまとめプリントでは、助詞に関する問題では、どの問題も間違えた児童は0人、促音に関する問題でも間違えた児童がほとんどおらず、授業内では、助詞や促音を意識することができたと言える。本単元で完成した児童の作文を見ると、促音を間違えた児童が3人、助詞を間違えた児童が1人、句読点を使えていなかった児童が0人であった。6月と9月に書いた作文と比べると、どれも人数が減っていることが分かった。本単元を通して表記に関する課題を意識できたと言える。また、本単元後に児童が書いた文章(図8, 9)を見てみると、上の児童は、本単元前の作文では助詞や促音の使い方に課題があったが、本単元後では正しく使うことができている。下の児童は、促音を使えていなかったが、本単元後は「っ」の位置は間違っているところもあるが、促音を使うことを意識することができている。表記に課題のあった児童が、克服したり意識したりすることができており、言葉のゲームは有効であったと言える。

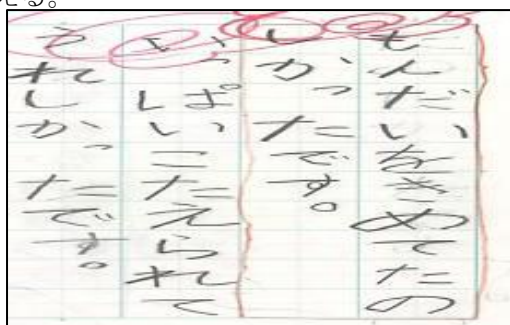


図8. 本単元後の児童の文章①

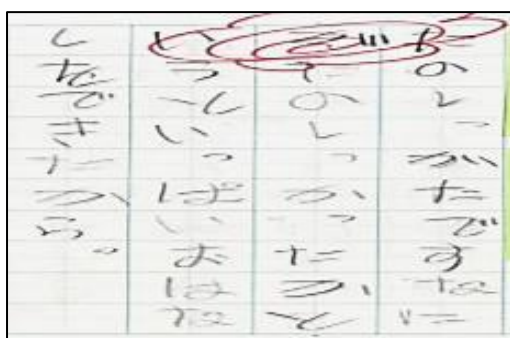


図9. 本単元後の児童の文章②

(2)「分かりやすい文章を考える力」のための活動

「分かりやすい文章を考える」ことは、書く経験が少ない1年生にとって難しいことであるが、活動を工夫することで根拠をもって考えることもできるということが分かった。実践で行ったように二つの文章を扱うことは、それぞれを比べてポイントを考えることができ、1年生が根拠をもって考える手助けとして有効である。また、並び替えによって構成を考えることは、文章の組み立て方を学ぶ経験になり有効であると言える。

(3)課題ー「言葉を正しく表記する力」ー

言葉のゲームは、助詞や促音について楽しく学ぶことができたが、見て答える活動であり、書くことへの繋がりが不十分であった。今後は、どうすれば児童の作文に繋がるかを意識し、活動内容を考えていくことが必要である。また、「言葉を正しく表記する力」に関しては、低学年の児童は今回扱った助詞や促音以外にも課題がある。例えば「きもちいい」が「きもちい」「きもちー」と書いてしまうなど、児童が話している言葉を書き言葉に変えることが難しいようであった。今後は、音と文字の一致をどのように促していくか考えていきたい。

引用・参考文献

- ・文部科学省(2006)「特定の課題に関する調査(国語)調査結果」国立教育政策研究所
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei/index.htm>
- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説国語編」東洋館出版社
- ・文部科学省(2013)「OECD 生徒の学習到達度調査～2012 調査国際結果の要約～」国立教育政策研究所